

## 3 讃岐守に転出

さて、努力の甲斐あって、道真は方略試に見事合格し、いよいよ官吏としての道を歩み始める。まず二十七歳のとき玄蕃助、ついで少内記に任ぜられた。玄蕃助は外交などを扱う官庁の事務官であり、少内記は中務省の書記官であつて、ともに語学力と文章力の優れた道真にもつともふさわしいポストといえよう。

やがて三十歳のとき、民部少輔に任ぜられた。今でいえば通産省あたりの局長クラスにあたるから、非常な出世といつてよい。ついで三十三歳のときに式部少輔、さらに文章博士になる。文章博士というのは大学寮において文章道を教える教授のことである。その文章博士時代に、天皇をはじめ重臣も居並ぶ前で『後漢書』を講義するという大役もつとめている。

このように、だいたい二十歳代の後半から三十歳代の終わりころまでは、長年培つた学問、とりわけ語学や文才を十分に活かしている官職を順調に歴任した。道真にとつて、得意な十数年間であつたらうと思われる。

ところが、四十二歳のとき一つの転機を迎えた。仁和二年（八八六）正月、式部少輔も文章博士も止めて、讃岐守に転出することを命ぜられたのである。讃岐守は今の香川県知事にあたるから、けつして低い地位ではないし、中央の要職にいた人が収入の多い知事クラスに転出するという例も珍しいことではない。

しかしながら、道真にはこれが大へん苦痛に感じられたらしい。『菅家文草』所収の詩をみると、自分は父祖代々学者の家に生まれ、その方面で国家に貢献してきたが、この期に及んで地方に転出しなければならぬのは残念なことだと嘆いている。けれども、勅裁をへて決まつた人事であるから、讃岐にはおもむかねばならない。その四年に及ぶ讃岐守時代は、道真にとつて、不本意な四年間だつたようであるが、不得意な地方行政にも一所懸命とりくんでいる。

たとえば、讃岐で詠まれた「路二白頭ノ翁ニ遇フ」という題の詩（『菅家文草』所収）をみると、路上で会つた白髪のお年寄から、讃岐国が昔からどのような治められてきたかということをいろいろ聞いたので、それを思うにつけても、自分なりに頑張らなきやいけない、と生真面目に決意をのべている。

そのなかで、とくに安倍興行とか藤原保則という先任国守の治績に感銘して、興行という人は自分にとつて兄上のような人だし、保則という人は父君のような人だから、そういう先達を見倣つてやつていきたいが、しかし、自分にはなかなか真似もできそうにないから、せめて「奔波ノ間、我詩ヲ詠ゼン」と書いている。

奔波の間、国中を巡視して駆け巡り、農民の生活ぶりはどうか、稲作の出来ぐあいはどうか、というようなことを尋ね歩いて、自分なりに誠心誠意民政に尽くすけれども、しかし暇ができたなら詩を詠みたい、という気持を率直にのべている。このあたりに、地方へ転出しながらも、やはり文人として学者としての本分を捨てきれない道真の、ジレンマというか苦しみというものが、よくあらわれていると思う。